

Title	産業界のリーダーたちによる授業が大学生の就職観に与える影響
Author(s)	新居, 佳子; 赤井, 誠生
Citation	大阪大学大学教育実践センター紀要. 2008, 4, p. 1-6
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/9957
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

産業界のリーダーたちによる授業が 大学生の就職観に与える影響

新居 佳子・赤井 誠生

The effect of a lecture by leaders from the industrial world on university students' vocational views

Yoshiko ARAI and Seiki AKAI

In recent times, many universities have begun to offer career guidance to their students. However, few quantitative studies have been conducted on the effects of this on students. Arai et al. (2007) examined how a lecture on business given by leaders from the industrial world affected undergraduates' vocational attitudes; the results showed that most of the factors that the students considered important before the lecture were regarded as less important by them after the lecture. One possible explanation for this is that the students discovered other factors that they had failed to consider earlier or developed more realistic views on vocations. This article proceeded to verify these two hypotheses. As a result, neither of the hypotheses was supported, but the number of students who did not wish to select their vocation immediately increased. We concluded that this was because the students realized that they needed more time to engage in various other meaningful things/activities at university before they decided on their vocation. Moreover, the lecture had a positive effect, especially on first year students, in terms of general education.

問題

大学におけるキャリア教育の必要性が強調され、経済界の協力を得つつキャリアセミナーやインターンシップ等、実践的なキャリア支援教育が導入されるようになって久しい。「決定時期の急な到来で、卒業期までにあまり就職を考えなかった学生には進路決定は非常に難しい(中西, 1980)」ため、早期よりキャリア教育を行うことには大きな意義がある。しかしながら、このような活動が学生の就職観にどのような影響を与えるのかについての定量的検討は、ほとんどなされていない。

そこで、新居・赤井・和田・堀下・松下(2007)では、大学の教養教育において経済界の協力のもとに行われた授業を受講した学生が、その就職観にどのような影響を受けたかについて、就職時の企業選択にあたって考慮されるであろう要因に焦点を当て、当該の授業をI Semester間受講する前後でその意識に変化が見られるか否かを検討した。その結果、重視される要因は受講前後を通じて「職種」、「業種」、「将来性」であったが、受講後にはほぼ全要因で受講前よりも考慮の程度が低くなった。

そして、この変化について、調査に用いられた項目以外の要因を個々の学生が見いだしたためかもしれないし、また、就職に対する要求水準が全体に下がり、より現実的な就職観を得たためかもしれないという考察を行った。

本論文は、このような授業の受講後にはほぼ全要因で受講前よりも考慮の程度が低くなることについての、上述の考察の検証を目的とする。具体的には、同授業において、仮説1として、調査に用いられた項目以外の要因を個々の学生が見いだした可能性を検証するために、新居ら(2007)で使用された就職時の企業選択にあたって考慮されるであろう項目に「その他」を設け、それに対する考慮の程度や具体的な内容について受講前後の変化を比較する。また、仮説2として、より現実的な就職観を得た可能性を検証するために、就職の現実性に関わるような数種類の質問を行う。これらの質問は、多くの先行研究にみられるような、就職時に考慮する要因としての「職種」などの項目よりも、より大きな就職観を問うている。それらに対する回答について、受講前後の変化に関する分析を試みる。

仮説1からは、「その他」の評定平均値が受講後には受講前よりも高くなるのが、また、仮説2からは、数種類の質問の回答に受講前後で変化が起こることが、それぞれ予測される。

方法

調査時期

平成19年4月9日(月)5時限および同年7月23日(月)5時限

調査対象者と実施方法

大阪大学で開講された全学共通教育科目(先端教養科目)「関西は今—ビジネスリーダーと語る『国際化時代の私たちの生き方』」(第I Semester 配当, 2単位)の受講学生を対象に、質問紙調査を行った。

本授業は、(社)関西経済同友会の協力のもと、関西の著名企業の社長など11名を講師として招き、各講師1回(うち2名のみ2回)ご担当いただくというリレー講義であった。各講師は非常勤講師を委嘱され、教員の処遇を受けていた。各講師の役職および授業のテーマをTable 1に示す。各回の前半(2回ご担当いただいた場合は1回目)は講師による講義が行われ、当該企業や業界の現状や戦略、あるいは講師の経営哲学や人生哲学が述べられた。後半(同2回目)は学生との質疑応答が行われた。学生にはその後、A4版用紙約1枚に感想を書かせ、これの提出と授業最終回に行われる試験が成績評価の対象とされた。

Table 1.

共通教育科目「関西は今—ビジネスリーダーと語る『国際化時代の私たちの生き方』」における各講師の役職および授業のテーマ

担当順	役職	テーマ
1	外食産業代表取締役会長	「食文化とグローバリゼーション」
2	家庭電器メーカー代表取締役副会長 ^{a)}	「国際化と大阪」
3	薬品会社常務取締役	「医薬品製造業と知財戦略」
4	人材派遣会社取締役社長	「働き方の多様化と生き方」
5	関西経済同友会常任幹事 ^{a)}	「国際化と日本のアイデンティティ」
6	ガス会社代表取締役社長	「エネルギー事業経営論」
7	電信電話会社代表取締役社長	「情報通信革命と大阪の未来」
8	独立行政法人日本芸術文化振興会理事長	「日本文化と国際理解」
9	工作機器メーカー代表取締役社長	「グローバルのものづくりと日本の役割」
10	繊維メーカー代表取締役会長	「紡績業とイノベーションの歴史」
11	経済研究所シニアフェロー	「日本経済の展望」

^{a)} これらの講師には2回ご担当いただいた。

調査は、授業の第1回のオリエンテーション後および第14回(講義最終回)の質疑応答終了後に、質問紙を配布し回答を求めた。第1回111名分、第14回86名分を回収し、回答に不備のあった者を除いた第1回108名(男子学生61名・女子学生47名、平均年齢18.46歳、 $SD=0.92$)、第14回81名(男子学生43名・女子学生38名、平均年齢18.79歳、 $SD=1.05$)を分析の対象とした。

調査内容

就職する際に重視する項目 新居ら(2007)で使用された、安田(1999)の、就職する企業を選択する際に重視されるであろう項目「規模」、「将来性」、「職種」、「業

種」、「勤務地」、「福利厚生」、「社風」、「知人の存在」の9項目に、「その他」を加えた合計10項目について、1「ほとんど考慮しない」から7「非常に考慮する」の7件法で評定を求めた。さらに、「その他」に関しては、「『その他』は具体的にどのようなものですか?」という質問を設け、具体的内容の記述を求めた。

就職観に関する質問 「あなたにとって就職は現実的なものですか?」「あなたはできるだけ早く就職したいですか?」「あなたは就職することに不安がありますか?」「あなたは就職は給料を得るためのものだと思いますか?」の4種類の質問について、「はい」「いいえ」「どちらでもない」のいずれかによる回答を求めた。

なお、デモグラフィック変数としては、所属、学年、年齢、性別と、受講登録をしたかどうかについて記入を求めた。

以上、調査に用いられた質問紙を付録1に示す。

得られたデータについて、授業の第1回における回答を受講前、第14回における回答を受講後として分析を行った。なお、新居ら(2007)で使用された9項目の回答については、ここでは報告を行わない。

結果

「その他」に関する分析

評定平均値 項目「その他」について評定を行っていた数は、受講前30名、受講後23名であった。

受講前と受講後の評定平均値および標準誤差をFigure 1に示す。

これについて、t検定を行った結果、有意な差は得られなかった ($t(48) = .62, n.s.$)。

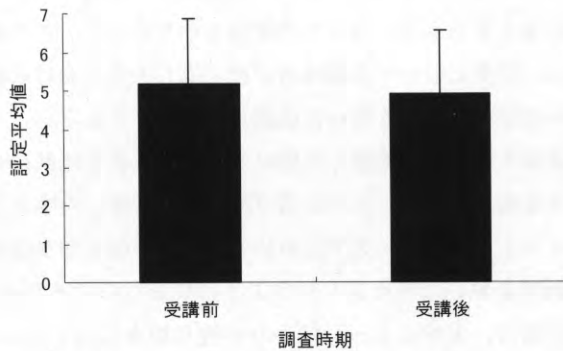


Figure 1. 「その他」における受講前と受講後の考慮の程度

具体的内容 「その他」の具体的な内容について、記述のあった数は、受講前20名、受講後10名であった。内容として、「給料」に関するもの(「給与」「賃金」「ギャランティー」)が多く見受けられたため、それらとそれ以外の内容に分けて、受講前後の比較を試みた。回答内容が特定不可能である1名を除いた受講前19名、受講後10名の、受講前と受講後の「給料」とそれ以外の回答率をFigure 2に示す。これを対象として、調査時期と具体的内容の2×2の χ^2 検定を行った結果、有意な差は得られなかった ($\chi^2(1) = .14, n.s.$)。

就職観に関する分析

「あなたにとって就職は現実的なものですか?」「あなたはできるだけ早く就職したいですか?」「あなたは就職することに不安がありますか?」「あなたは就職は

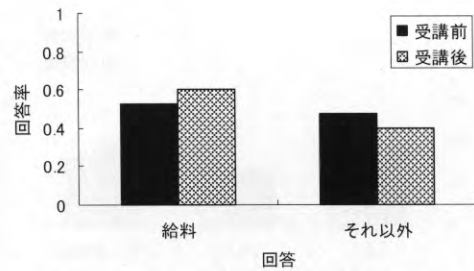


Figure 2. 「その他」の具体的内容における給料とそれ以外の回答率

給料を得るためのものだと思いますか?」の各質問における受講前と受講後の「はい」「いいえ」「どちらでもない」の回答率を、それぞれFigure 3, Figure 4, Figure 5, Figure 6に示す。

各質問について、調査時期と回答の2×3の χ^2 検定を行った結果、「あなたにとって就職は現実的なものですか?」「あなたは就職することに不安がありますか?」

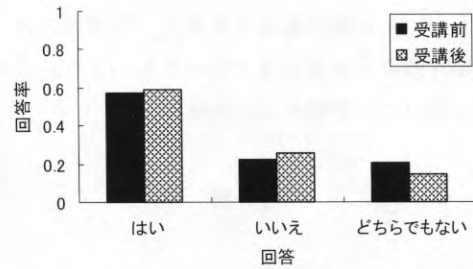


Figure 3. 質問「あなたにとって就職は現実的なものですか?」に対する各回答の回答率

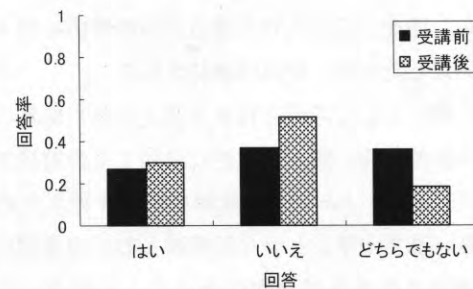


Figure 4. 質問「あなたはできるだけ早く就職したいですか?」に対する各回答の回答率

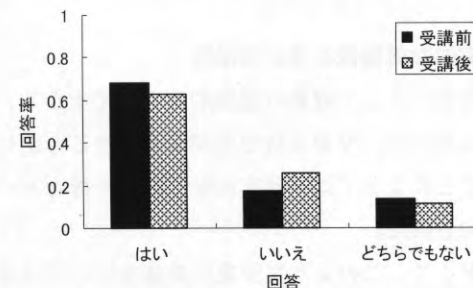


Figure 5. 質問「あなたは就職することに不安がありますか?」に対する各回答の回答率

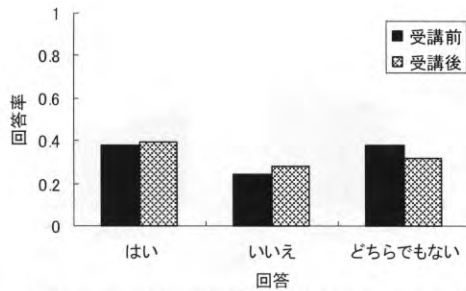


Figure 6. 質問「あなたは就職は給料を得るためのものだと思いますか?」に対する各回答の回答率

「あなたは就職は給料を得るためのものだと思いますか?」の3種類においては、有意な差は得られなかった(それぞれ、 $\chi^2(2)=1.09, n.s.$, $\chi^2(2)=2.02, n.s.$, $\chi^2(2)=.81, n.s.$)。しかしながら、「あなたはできるだけ早く就職したいですか?」においてのみ、全体として有意な差が得られた($\chi^2(2)=7.48, p < .05$)。残差分析により、受講前では、「いいえ」が期待値よりも少なく「どちらともいえない」が期待値よりも多く、受講後では「いいえ」が期待値よりも多く「どちらともいえない」が期待値よりも多いことが明らかにされた。

考察

調査に用いられた項目以外の要因を個々の学生が見いだした可能性

受講前後において「その他」に関する変化がなかったことから、調査に用いられた項目以外の要因を個々の学生が見いだしたという仮説は棄却された。

「その他」として考慮されると考えられた給料に関しても、具体的内容に関する記述において受講前後で変わりはなく、また、「あなたは就職は給料を得るためのものだと思いますか?」という就職観としての質問においても受講前と受講後で差がなかったことから、これが「その他」のひとつであり、受講前後で変化を起こすという可能性も支持されなかった。

より現実的な就職観を得た可能性

「あなたにとって就職は現実的なものですか?」という質問において、受講前後で差がなかったことから、受講することによってより現実的な就職観を得たという仮説も棄却された。

したがって、このような授業の受講後にはほぼ全要因で受講前よりも考慮の程度が低くなることの原因は、本調査からは特定できなかった。

受講後に、早く就職したくない学生が増える結果について

しかしながら、「あなたはできるだけ早く就職したいですか?」という質問に対しては、受講後、早く就職したくないと答える学生の有意な増加が明らかになった。この結果は、本授業において社会の第一線で活躍する人たちの講義を聞き、質疑応答を行う中で、受講生が、講演者と自分を比べ、そのギャップを感じ、今のままの自分がすぐに就職するわけにはいかない、もっと実力をつけなければならないと思い、就職はその後だと考えるようになったのではないかと推察される。しかし、それは決してネガティブなものではない。これに関しては、「あなたは就職することに不安がありますか?」の質問に対する回答の変化はなく、不安感の増加などは見られないことから考察される。つまり、この結果は、受講生が大学での講義や経験に対してよりポジティブな考えを持つようになったものと考えられる。すなわち、大学の4年間を単なる通過地点ではなく、より有意義に過ごそうという考えに変化したため、就職までの時間をより多く必要とするようになったのではないだろうか。この推測は、授業において各講演者が繰り返し大学における幅広い経験の重要性を彼らに強調したことにもよる。

就職という点を考慮した時にも、大学生活を無駄にせず有意義に過ごすことが大切であると、受講した学生が考えるようになり、大学における講義や多種多様な経験に価値をおいた考え方を行うようになったのであれば、本授業は、大学に入ったばかりの彼ら彼女らにとって、教養教育として大きな効果をもたらしたといえる。

このように考えると、キャリア教育は、大学生活を充実させるための一つの契機を与えるものでもあるといえるだろう。

引用文献

- 新居佳子・赤井誠生・和田一成・堀下智子・松下戦具(2007). キャリア教育授業が大学生の就職意識に与える影響 大阪大学大学教育実践センター紀要第3号, 1-4.
- 中西信男(1980). 大学生の選職行動 中西信男・麻生誠・友田泰正(編)就職 大学生の選職行動 有斐閣 pp. 51-80.
- 安田雪(1999). 大学生の就職活動 学生と企業の出会い 中央公論新社

(あらいよしこ 大学教育実践センター・助教)

(あかいせいき 大学教育実践センター・教授)

【付録1】

就職の意識に関するアンケート

1. 就職時、企業を選択する時に下の各項目をどの程度考慮しますか。以下の線上の該当する箇所に丸（○）印をつけてください。（企業以外を就職先に考えている人は想定して答えて下さい。）

	←考慮しない				考慮する→		
	ほとんど	かなり	やや	どちらでもない	やや	かなり	非常に
規模	-----						
将来性	-----						
知名度	-----						
職種	-----						
業種	-----						
勤務地	-----						
福利厚生	-----						
社風	-----						
知人の存在	-----						
その他	-----						

* 「その他」は具体的にどのようなものですか？

→ ()

2. 以下の質問にお答え下さい (該当するものを○で囲んで下さい)。

- あなたにとって就職は現実的なものですか？
はい いいえ どちらでもない
- あなたはできるだけ早く就職したいですか？
はい いいえ どちらでもない
- あなたは就職することに不安がありますか？
はい いいえ どちらでもない
- あなたは就職は給料を得るためのものだと思いますか？
はい いいえ どちらでもない

3. 以下の質問にお答え下さい。

所属： 学部 (研究科)

年齢： 歳

性別： 男 女

受講登録をしましたか：はい ()、いいえ ()

ありがとうございました。
(大学教育実践センター 赤井誠生・新居佳子)